

工本3N-24

進呈

教育南部方言集

魚田村

青森縣三戶郡視學 稻葉萬藏君 校閱  
青森縣三戶郡八戶尋常高等小學校長 阿部洋君  
青森縣三戶郡八戶尋常高等小學校訓導 築瀨榮 編纂

818.21 Y 507 n

凡 例

- 一 本稿は廣く南部地方の方言を蒐集して之に的確明快なる解釋を與へ且普通語と相對照して言語改良の資に供せんとす
- 一 轉訛等の評語を以て語源と意義とを區別すと雖間々誤謬なきを保せずそれらは他日發見次第訂正すべし
- 一 篇中間々古語を掲載せるは方言にあらざるを知らしめんがためなり
- 一 品詞語格を論ずるは本稿の主旨にあらざるを以て須く之を省けり讀者幸に之を諒せられよ
- 一 巻尾に掲載せる俗歌は皆口傳によりて傳はれるものなれば文句意義に於て誤謬なき能はず讀者幸に咎むること勿れ

明治三十八年十一月十六日 日露講和紀念

築 瀨 榮 識



31241

あ の 部

あいて 水のことにて小兒が非常に水を愛し  
飲むより愛兒といふか又た小貓小犬などを  
戯れどもいふ小兒語

あかはら 蟻原のことにて脊黒く腹赤き故赤  
腹といふ

あかびつき 赤子のことにて其貌赤紫に似たる  
よりあかびつきといふ

あかめつたい 赤目のことにて下脛を指にて引  
き廣げ赤くして小兒を威す戯なるが轉じ  
て事を否み邪け或は人を馬鹿にする語とな  
れり可赤目の義

あかはたもち 海草の一種なる角又(鹿角菜)  
にて製したる餅のことにて酢醤油などをか  
けて食ふ

あくど 踵又はさびすのことにて足凹處の義

あくたいつく 人を悪口することにて悪口を

以て對ふるより惡對衝といふ

あげた 脛のことにてあぎとの轉訛

あげる 嘔吐のことにて胃中の物を戻し出すよ  
り上るといふ

あさい 浅いの訛にて水や桶などの浅きこ  
とをいふ

あさごき 絲葱の訛にて蒜の一種摘み取りて  
食用とす

あたりしがい 常次第の訛にて目的なしに物  
を當ることといふ

あとへん 文字を逆にかくことにて先に書く  
べき偏を後に書く故後偏といふ

あとふき 後引の訛にて酒宴などの時飽くこ  
とを知らずして限りなく飲食することといふ

あどざりひし あとびさり即播鉢蟲のことにて  
て乾きたる砂に播鉢の如き穴を掘り其中に

棲み能く蟻を捕ふ後に去り隠る、故後去蟲といふ

あのぶつ 彼程の訛にて又あればかり、われくらゐなご、いふ

あはけない あつけないの訛にて物の充分ならぬ時に淡けないの義

あはざり 額鳥のことにて形弱に似て小さく多く粟を喰ふ故粟鳥といふ

あひ 鶯の略語にて形鴨に似て大きく足に廣き蹠ある鳥なり

あぶ あぶくの略語にて水の泡をいふ

あぶむし 沫吹蟲の略語にて草木の枝葉間に沫を吹き其中に棲む故あむむしといふ

あはば 母のことにて吾母の轉訛或は阿母阿婆の義か

あつたらむしかる 可惜の訛にて惜むことをいふ

あつちや 彼方の訛にて又あちらともいふ

あつちやとてた 杜鵑の鳴聲のことにて彼方へ飛行の義關東にて天邊羯たかといふ

あまぢこい あまだるいの訛にて味の甘過ぎより甘味濃といふ

あべ 歩の轉訛にて人を何處へか誘引する時などにいふ

あめる 儲るの轉訛にて食物の儲腐りて飴の如くなる故あめるといふ

あめばち 蜜蜂のことにて常に飴の如き蜜を出すより飴蜂といふ

あめりかつけき 燐寸(英語)のことにて亞米利加より來れる故あめりか附木といふ

あめふりばな 晝顔花のことにて多く雨の降る時に咲く故雨降花といふ

あんにじよ 網麻のことにて網をすくに用ふる麻絲故網緒といふか

あんど 他人の子を尊び呼ぶ語にて吾子或は兄子の轉訛又あいなともいふ

あもこ 怪物のことにて蒙古來襲の時我國人大に怖れたる故嗚呼蒙古といふあは感嘆詞なり

あや 父のことにて吾爺或は阿爺の義

あねこ 若き女のことにて姉御或は姉子の義

あらうと 彼等のことにて彼等人の義

あらずま 甘鹽鮭のことにて鹽を疎く蒔き漬くるより疎蒔といひ或は簀卷にするより粗巻の義にいふか

あらね 霰の訛にて雪の氷りて降るものをいふ

あらじる 魚の骨汁のことにて骨及び皮を皆雜せて煮る故粗汁といふ

あをびき 青豆を莖のまま刈り乾し牛馬の飼料となす故青引といふ

あわわ 小兒等の隠遊などして止むる時にいふ語なり

あづらへる 預くるの訛にて例へは銀行に金をあづらへるなどといふ詭るにいふは非なり

いの部

いかける 言ひ掛くるの略語にて物事を問ひ掛くることをいふ

いきしま ゆきしなの訛にて行掛或は途上のことをいふ行きは往きと同じ

いきやる 物に出逢ことにて往き逢ふの轉訛

いぬく 動の轉訛にて物の動揺することをいふ

いしから 石川原の略語にて小石のある川原をいふ

いたしがる 勞の訛にて物を惜み勞ること

潮來村より流行始めたる小唄の潮來節より來れるか

いちやめく 踏踏の轉訛にて酒なごに酔ひて足踏の確かならぬ状にいふ

いちらく 毎度或は度々など、言ふ語にて多く物を貰ひたる時などにいふ

いたや 楓樹のことにて板を割る時矢に用ふる故板矢といふ

いぢくされ 意地悪ことにて意地腐の義いつたりかつたり 何時でもといふことにてかつたりは彼時をいふか

いつに 疾にの音便疾にのどにて何時の略轉いつたさき 一寸又暫時のことにて一時間の義いつたさきない 一切與ないのことにて一體くれないの義

いと 麻絲の略語 農家語

いとこもち 糯米と餅粟とを雜せて搗きたる

餅のことにて從兄弟餅の義

いはひたで 結納のことにて婚姻前互に布帛肴等を贈りて約束する故祝立といふ

いびきりもち 糯米粉に小豆を搗き雜せ稜形に切り火に炙りたる餅故灸切餅といふ又稜餅ともいふ

いひじやまだ 意氣地なきことにて物言ふ様至て氣力なき故言様だの義か

いびつ 飯櫃の略語にて凡て飯を盛る器即めしびつたはちなごをいふ

いへよでた 家を出たの訛

いんぶり 杓は舊正月十四日より十六日まで各村の農民等一組三十人乃至四十人隊をなす先一組の内三名或は五名烏帽子直衣にて先に立ち人家へ入り舞ふ同勢之に従ひ圓形を造り音調を和す夫より大黒舞惠比壽舞又

は金輪切狂言などを演ず是昔藤九郎盛長の徒然を思めんがため始めたりと或は源光行公禰部五郡に封せられし時人民の歸服を得んがため新年の賀と稱して其館に入らしめしといふ杓は農具の一種

うえの部

う うを往々訛りてをと稱ふ例へば鱗 鰻 馬等の如し

うさく 糯米粉にて製したる團子を餡と砂糖との汁に入れて煮たるものにて煮るに従ひて次第に浮くる故浮々といふか

うしろくご 頸窩のことにて後窪き故後窪の訛にいふか

うすなまこ 滑稽ことにて薄生心或は薄春心の義

うすかまな 搦ふな即打捨置とのことにて少

しも搦ふなの義より薄搦ふなどいひ又さらかまなごもいふ

うと 空虚の轉訛にて竹木などの中の空しきことをいふ

うとむくり 鳥獸などの皮を丸剝にすることにて空虚に剝く故訛りてうとむくりといふ

うば 伯叔母のことにて姥或は祖母の義にいふか

うばかしら 翁草のことにて春紫赤色の花咲き後白色に變じて飛散す其狀姥頭の如し故にうばかしらといふ

うへばら 上方のことにて腹の上下の義より上腹といふか

うまれぞこなひ 不具者のことにて生損の義うらばし 木の梢即うらのことにて梢端の義

(末の轉うら) 擬寶珠のことにて又玉簪といふ山野うるい

に自生して一 根數十葉夏穂状の長さ花をつ  
 うろこ 頭垢のことにて鱗に似たるよりうろ  
 こといふ 狼狽の訛にて又うろたへるともい  
 うるたく 大便のこをいふ小兒語  
 うんこ 舌を出し人を馬鹿にすることをいふ  
 小兒語  
 ねじこ 糞にて籠形に編み中に嬰兒を入れる  
 故嬰籠といふ  
 ねぢよ 蝦夷の訛にて古稱ねみじの轉發多く  
 して蝦に似たればねみじといふ  
 ねせる 腹立即怒ることにて僻るの義

おうほ 鳥のことにて形状みみづくに似て晝  
 伏し夜出でて小鳥を捕ひ食ふおうほは其鳴  
 聲により名附たるか  
 おかた 妻の敬稱にて奥方或は御方の義  
 おがる 物の成長のことにて大きくなるの轉訛  
 おきり 燠の訛にて薪の燃ゆる火になりたる  
 ものをいふ  
 おさへめん 麵類を饗應する時食器に麵類の  
 なくならぬ様に續け押ふる故押麵といふか  
 おしぐり 搗栗のことにて乾したる栗を臼に  
 て押壓して製する故押栗といふ  
 おしやらく 女郎のことにて平素美服を着飾  
 る故御洒落といふ  
 おにこぼこり 鬼事遊のことにて鬼子追の訛  
 小兒遊戯の一種をいふ  
 れたまこ 子供の人形のことにて其貌の美し  
 きより御玉子といふ

おの部

れにのほね 齒餅のことにて齧を固むる意  
 より正月餅を乾し置き六月一日に食ふ固き  
 故鬼の骨といふ  
 れだいもつ 金銭の總稱にて物買ふに渡す代  
 金故御代物といふ  
 れたち 食物を強ふることにて旅行に立出の  
 際食物を強ひたるより御立といふか  
 れつる 汽車馬車などより下ることにて落つ  
 るの義にいふは非なり  
 れつける 顛倒のことにて御覆の義  
 れはじき 小女の小石を弾き互に勝負を争ふ  
 遊戯の一種をいふ  
 れひるまひこ 飯事遊のことにて御振舞の訛  
 こは附語なり  
 れちち 啞の訛にて言語を發せざるものをいふ  
 れっかない 怖しの轉訛にて即こはこいふ

たどし 穴藏(害)のことにて地を掘り穴を作  
 る故穿の略語にいふ  
 たざろつた 小兒などの目覺のことにて驚くの義  
 にいふは非なり  
 れま 馬の訛にて又梅をおめなどいふ  
 れまぶり 御守の訛にて神社佛閣より信者に  
 與ふる守札をいふ  
 れもせ 重の訛にて凡て物のねさへとなる具  
 をいふ  
 れよつげ 恐しいのことにて妖怪は最恐しきよ  
 り御妖怪といふ  
 れらご 已等即われらのことにて已等人的の義  
 れりく 多くの訛にて物の澤山なるをいふ  
 れれ 已の略語或は吾の轉訛  
 れろのみ 全吞の轉訛にて物を噛み碎かずし  
 て吞むことをいふ  
 たほな 田甫道のことにて大畷の略語農家語

たやかた 兄のことにて凡親方とは我身に恩ある人或は一組合の頭たる者といふ親方の義にいふは非なり  
たかこひやれ 病氣見舞の時御大事御大切なことにて御悲長或は御日長の義か  
たひなが 盆の十六日に佛壇に麵類を供ふることにて御悲長或は御日長の義か  
たはや 本家のことにて大家の義或は店子より家主を呼ぶ語にもいふ  
たほこ 嬰兒即赤子のことにて御坊子の義

かの部

がいだか 毛蟲のことにて草木に害ある故害集或は毛生集の義か  
がいた 物の澤山なることにて害になるの義或は意外の略轉か  
かいは 柏葉の訛にて或は葉の大なるより桶

瓶なごの蓋に用ふる故蓋葉といふか  
かいもち 蕎麥煉のことにて蕎麥粉を掻き餅の如くなす故掻餅或粥餅といふか  
かいですき 雪葩のことにて雪を掻く故掻餅或は權鋤の義か  
かいのしる 種々の物を雑せて煮たる汁のことにて粥の如く煮る故粥の汁といふ  
かうがいうち 木を削り地に挿し互に勝負を争ふ遊戯の一種なるが昔戰場にて敵の首に笄を差し置き己の功となしたるより笄打といふ或はねとらちともいふ  
かが 媽媽の訛にて母又は妻を呼ぶ語にいふ  
がき 小兒を罵り呼ぶ語にて餓鬼の義  
かぎづき 爐上の鉤のことにて鉤附の義  
かきざし 垣のことにて垣根或は垣岸の義  
かく 材木のことにて角ある故かくといふ  
かくち 家の裏手のことにて圍地格地或は廓

地の義か  
かくれんこ 隠遊のことにて小兒の遊戯の一種をいふ  
かしらぎ 柏木の訛にて薪炭材に用ふる質堅き木なり  
かせ 海膽(雲丹)のことにて其介殻を甲贏といふ  
かたばら 片方のことにて傍の訛或は片腹の義  
かたこと 頑固なることにて片意地或は偏事の義か  
かっこ 漁船の稍大なるものにて舵子の乗るよりかっこといふか  
かぢ 跛のことにて足の不自由なるより多く鍛冶職をなし、故鍛冶といふ  
かっちよ 麻絲の下等なるものにて茶褐色なるより褐結といふか

かっこべ 竹籠の一種にて輕籠の轉訛或其形類(樂器の名)に似たるより羯鼓邊といふか  
かっこ下駄のことにてからころと音する故かっこといふ 小兒語  
かっつく 追着ることにて後より駆け着くる故駆着といふ  
かっぱぐ 急に飯を掻込ることにて俗にかっこいといふ  
かっぱし 乾草のことにて草を刈り乾すより刈乾といふりは音便つに變ず  
かっじき 草木の嫩葉を刈り取りて田の肥料となすものにて刈肥料の義(肥料の條を見よ)  
かっどほす 人に先駆することにて勝通或は駆通の義  
かっけ 蕎麥粉を捏ね薄く切り生豆腐と共に白湯にて煮葱味噌を附けて食ふ又つつけともいふ

がつけ 崖の訛にて巖の險峻所をいふ  
 かつける こう 雞のことにてかつけるこうは其  
 鳴聲により名附たるか小兒語  
 かつち 深山或は谷間などのことにて關地の義  
 蝦夷語  
 かつぶする 突伏するの轉訛にて體を前に突き  
 伏すをいふ  
 かてもの 菜物のことにて食事する時飯に糅  
 て食ふ故糅物といふ  
 かてる 物を雜せることにて糅入の略語又小  
 兒を子守するにもいふ  
 かててる 空腹のことにて俗語かつゑるの訛  
 かどう 川骨の根のことにて多く池沼などの  
 泥中に生じて夏黄色の花咲き根は子蘭盆に  
 佛壇に供ふ  
 かさいし 燧石のことにて角ある故角石といふ  
 かの 鮭の雄のことにて雄猫の義より轉訛し

たるか  
 かなぎ 薪のことにて堅木の訛  
 かなへび 蜥蜴のことにて形守宮に似たる爬  
 蟲の一種なり  
 かなめ 田畑の分作の代りに金を遣ることに  
 て要の義要は動し得ぬ物事をたとへていふ  
 語なり  
 かなめぎけ 婚姻前に酒を贈り嫁娶の約束を  
 整ふることにて要酒の義  
 がに 蟹の訛  
 かにする 罪を免すことにて堪忍或は寛にす  
 るの義  
 かねげた 滑下駄のことにて鐵を附くる故金  
 下駄といふ  
 かはらすいめ 鶴鶴のことにて多く川原に棲  
 む故川原雀といふ  
 かひやさなべ 肉類などを煮る小鍋のことにて

昔海扇貝にて物を煮たるより貝焼鍋といふ  
 かぶける 徹るの訛にてけるは助語  
 かぶむし 草鞋蟲又臆蟲のことにて濕地に生  
 じ全身灰白色なり  
 かへりしま かへりしな訛にて歸途のこと  
 をいふ  
 がべあたま 頭癩のことにて其狀壁に似たる  
 より壁頭といふ  
 がへろご 蝸蚪のことにて蛙子の訛  
 がべ 壁土の略訛にて壁に塗る故壁といふ即  
 粘土のことなり  
 かほのけ 眉毛のことにて顔にある故顔の毛  
 といふ  
 かまり 匂のことにて香氣ある故薰の義にい  
 ふか  
 がまむし 源五郎蟲のことにて池沼などの蒲  
 の根にすむ故蒲蟲といひ又ひらかむしとも

いふ  
 かまご 果物の核のことにて核の所竈に似た  
 るよりかまごいふか  
 かまごもち 金満家のことにて富家は人数も  
 多く竈も多故竈持といふ  
 かまごにだす 別家せしむることにて世帯を  
 持たしむる故竈に出すといふ  
 かま 鐵瓶のことにて釜は湯を沸し飯を炊く  
 に用ふ然に鐵瓶を釜の義にいふは非なり  
 かまごうふ 湯豆腐のことにて生豆腐を釜に  
 入れて煮るより釜豆腐といふ  
 かんばら 上方のことにて上腹の義みは音便  
 んに變ず  
 かんな 縫糸のことにて機絲の義より  
 轉じたるか  
 がんじよ 牡馬のことにて岩にも乗り上げる勢  
 ある故岩乘といふ



かんだいこん 大根の皮を剥き煮て凍らしめ  
たるものにて汁種の料となす寒大根の義  
かもあるな 構ふな の訛にて物に係らしめぬこ  
とをいふ  
かもり 水鳥の蹠のことにて蹠は河を渡るに  
必要なる具なれば河渡の略訛にいふか  
かやく 薬味のことにて蕎麥切を食ふとき香  
料として用ふる故加薬といふ  
かんばん 印半纏のことにて何人にも見易き  
故看板といふ  
からこにしん 身吹餅のことにて素乾にした  
る故乾餅といふこは附言なり  
からやま 懶惰者のことにて一定の職業なき  
故空役といふか  
からさづ 我儘勝手のことにて性頑なる故片  
意地の義にいふか  
がらうと 空にして廣きことにて伽藍堂空虚或

は空門などの義にいふか  
からつけぎ 燐寸のことにて唐(外國の稱)よ  
り來れる故唐附木といふ  
からまる 犬猫などのよく懐きたることにて  
馴れ戯る、故絡まるといふ  
かも 小兒の翠丸のことにて其形鳴に似たる  
よりかもといふ  
かるうめ 杏のことにて輕味なる故輕梅といふ  
からみあめ 水飴のことにて著なごに絡む故  
絡飴といふ  
がらがいじ 葦切のことにて夏葦原にすみ鳴  
聲甚喧しき小鳥にて一名葦原雀といふから  
がいじは其鳴聲により名附く  
かる 物を買ふことにて借の義にいふは非なり  
かるまじや 輕業の訛  
かるこい 輕いの訛にてこは附言なり

部の

さめない 物に失望したる時或は氣に合はぬ  
時などにいふ語にて義は無いの意か  
さかす 雙のことにて音聲を聞かざるより不  
聞といふ  
さぎ 杵の訛にて臼の穀物を搗く道具をいふ  
杵木の義  
さぎの 蒸汽車の略訛  
さしね 精々る米粟などのことにて白にて搗  
く故軌稻の略語さしねといふか  
きたなし 汚穢のことにてきたならしの訛  
さかかき 着物のことにて身體に着懸くる故  
着懸といふ  
さなぐる 物を切斷のことにて切捨即切投ぐる  
の義  
さつ 櫃のことにて木櫃の義ひは音便つに變ず  
さばじ 切端のことにて切りたる物の端をいふ  
さびころね 丸寝或は假寝のことにて其場に

寝る故着所寝といふ  
さみ 玉蜀黍のことにて丈五六尺夏葉の間に  
大なる苞を生じ熟すれば炙りて喰ふ南蠻黍  
の略語ひは韻通みに變ず  
ざんがよい 魚の新しく活のよいことにて銀  
光ある故ざんがよいといふか  
さもやく 腹立即怒ることにて心の焼くるが  
如くなる故臆焼といふ  
さらくむし 蠶魚のことにて衣服書籍など  
の間に生じ白色雲母の如き光ある故煌煌蟲  
といふ  
さりすね 機糸の切端のことにて切捨の訛  
さりだし 肉類の切屑のことにて小刀の切出  
の義にいふは非なり  
さる 煙管の略語  
さろくかんこ べろくのかみのことにて  
紙捻などの端を曲げ兩掌にて廻し其端の向

く方を見て物の判断をなすをいふ  
きびちよ 急須の轉訛にて茶を入れ湯をさし  
て煎じ出す器をいふ  
さべん 鉛筆のことに木にて造りたる筆故  
さべんといふ

### くの部

くさい 狸のことに肉に一種の臭氣ある故  
くさいといふ  
くさだ 藁屑のことに草朶の義  
ぐし 屋上の棟のことに長く貫さ亘す材故  
串といふか  
ぐせる 小鳥のよく啼くことに轉訛  
ぐせやみ 懷妊にて身體に異状を呈す時々病  
む故癖病といふ  
くせもの 剛力者のことに強盜の如き曲者  
にいふは非なり

くそくらへ 人を馬鹿にする語にて屎喰の義  
くそへび 蝮蛇のことに尿色せる故屎蛇と  
いふ  
くちびろ 唇の訛  
ぐづめく 小言を言ふことに愚痴如の訛ぐ  
づめくといふ

くさい 物事の六ヶ敷ことにてくなくしの  
轉訛或は濃き酒などにもいふ  
ぐつたり がつかりしたることに働こ過ぎて  
氣の挫けたる状にいふ  
くご 焔爐のことに竈の煙出に似たるより  
曲突といふ  
くはんだい 鍛のことに鍛臺の義  
くばる 物を持ち運ぶことに配の義にいふ  
は非なり  
くびた 頸の訛にて昔頸の飾りに玉を附けし  
より頸玉といふくびたは頸玉の略語

くびかゝり 首縊のことに滑繩などを樹に  
懸け首を縊るより首懸といふ  
くべる 薪を燃すことに燻ぶるの義  
くぼ 蜘蛛のことにほは韻通にも變するよ  
りくぼといふ  
くまかくし 凡て興作品などの悪しき所を隠  
すことに隈隠の義隈に物影になりて暗き  
所をいふ  
くまる 繩の轉訛にて糸や髪などの纏れたる  
状にいふ  
くられる 叱らるることに氣遣の如くなる  
故狂はるゝの義にいふか  
くらせる 人を殴打のことに拳を喰はしむる  
の義か  
くらすみ 暗所のことにて凡て隅は暗き故暗  
隅といふ  
ぐらかへり 穿物を踏覆すことに動き覆る

### けの部

けかた 凶作のことに穀物の實さる故けか  
けかた  
故動揺覆といふ  
くりかちや 栗殻の訛にて栗の毬囊をいふ  
くるび 胡桃のことにびは韻通みに變する  
故くるびといふ  
ぐれく 線々との訛にて物の廻る状にいふ  
ぐれいと 悉皆即すつかりのことにぐれいと  
喰べ又ぐれとい飲みたりなどいふあり  
のまゝ或はそのまゝの義  
くろこぶし 蹠の訛  
くわれる 毀るるの轉訛にて物の碎くること  
をいふ  
ぐわいぐり 周圍のことに外廓の轉訛か  
くをみる 骨折或は心配することにて苦を見  
るの義

ちどいふけかちハ飢渴の轉なり  
けそとけろりとの訛にて物に感せず何氣な  
さ體をいふ  
けつげだす物を考出 ことにて結解出の義結  
解は計算と同じ

けつつ 尻のことにて穴ある故穴といふ  
けつぽらいない 愛想或は張合なきことにて多  
く來客などのある時に言ふ語なり

げつば 末席のことにて末派の轉訛或は下  
端下派の義か  
げすたる 肥桶のことにて下水などを入る、  
故下水樽といふ

けんびさ 疰癢の訛にて力仕事などして肩の  
張ることをいふ  
けやく 親しき人を呼ぶ語にて契約の義

けり 靴のことにて形影に似たるより履とい  
ひ又爪先にて物を蹴る故蹴といふか

ける 物を他人に與ることにてくれるの轉訛  
けら 蓑のことにて雨の降る時着物の上に着  
る故袈裟の義より轉訛してけらといふ  
けへ 喰への轉訛

この部

こ 總て物の語尾にこを附するを常とす例へ  
ば馬こ人こ筆こなど、いふが如し  
こかこ 椀籠のことにて昔椀を御器といひし  
より御器籠を略してこかこといふ

こがし 焦飯の轉訛にて飯の焦着よりこびと  
もいふ  
こさ 碗のことにて御器或は合器といふ古語

こさあらひ 水澄のことにて水上を椀の如く  
圓く浮游する小蟲故御器洗といふ  
こきたない 物の穢とにて少々穢き故小穢と  
いふ

こけ 魚鱗のことにて魚に鱗あるは恰も苦の  
生ひたるが如き狀故こけといふ

こうせんこ 鳳仙花の轉訛にて夏紅白紫色の  
花咲く觀賞植物なり  
こうが 雪隠即便所のことにて佛家の所謂後  
架の義古語

ごしよいも 馬鈴薯のことにて豊年の時は一  
株五升を得る故五升薯といふ  
ごじやります 御座在の訛

ごせやく 腹立即怒ることにて僻焼の轉訛か  
ごだし 繩或は蔓草などにて編みたる輕籠の  
一種にて籠出の義か

こちよがす 櫛の訛にて肌の手を觸れ痒みや  
うなる感起さしむることをいふ  
こつちや 此方或はこちらの訛

ごつちよ 御馳走の訛にて饗應を馳走といふ  
は非なり 馳走は周旋の義然し設けに奔走す

この意か  
ごご 吃のことにて思ふやうに言語を發する  
こと能はざる故語痼の義にいふか

こて 牡牛のことにて特牛の轉訛特牛は牡牛  
の壯健なるものをいふ  
こてい 妻の夫に對する訛にて御亭主の略語

こてゆび 手の小指の訛にて小手指の義  
こなさせ 産婆のことにて兒産せの義  
こなれる 物の揉皺になることにて消化の義

こなんばん 蕃椒粉のとにて粉南蠻の義(な  
んばんの條を見よ)  
このかぬすびと 小盗人のことにて僅の物品

を盗むより粉糠盗人といふ  
このかづけ 澤庵漬のことにて粉糠漬の義  
こびつく 焦着の訛にて飯などの鍋に焼着こ  
とをいふ

こびり 小書こびりの訛しにて朝飯あさめしと晝飯ひるめしとの間に餅もち

こぶら 豚ぶらの訛しにて脛しねの背肉せにくをいふ

ここまる 敬禮けいらいすることにて體からだを前に屈かする

こまふで 故跣こまふでの訛しここまるといふか

こまをどり 盆踊ぼんおどりの一種にて三四十人一組と

なり藁わらにて作りたる裝飾さうじゆせる駒こまに跨またり笛太ふえ

鼓つづみの調子てうしに合せ踊おどるをいふ

ごんば 午勞ごんばの訛し

ごんばほり だ、まくことにて亂暴らんぼうする故剛ごう

暴掘ぼうくわ或は根ねの深ふかき所ところより午勞ごんば掘くわといふか

ごんもづ 芥かひのことにて芥屑かひくずの義ぎ

こめたら 米俵こめたらの略語りやくご

こもかぶり 淫言婦こもかぶりのことにて蕪被こもかぶりの義ぎ

ごよむし 根切蟲ねきりむしのことにて草木くさくの根ねを切る

地蟲ぢむしといふ

これぶつ 是程これほど或はこれしきの訛し

こはい 物ものに恐おそる、ことにて足の曲まげ難かたき意い

より轉てんじて草臥くたびたることにいふは非ひなり

さ の 部

ささをしやさをしやと訛なること多たし例たへば

検査座敷けんさざしき等の如ごとし

さいばん 俎なのことにて物を截きる板故截板さいばんと

いふ或は菜板さいばんの義ぎか

さいのかみ 媒介者ないかうのことにて道祖神みちのかつらの訛し幸さい

神の義ぎか

さいもくながす 麵類めんるいを食ししたる後のちに大杯おほきに

て材木ざいぼくを流ながすが如ごとく飲のむ故材木流ざいぼくといふか

さうだごったさうだらうの訛しにて物ものを想像さうぞうす

る時にいふ語ことばなり

さかり 祭禮まつりのことにて人々びと雑踏ざつたつして賑にぎなる

故盛こもりといふ

さがった 魚類いさなの腐氣味くろみして悪あしくなりたるも

の、ことにて垂下たれさの義ぎか

さぎすむ 耳みみを澄すして音ねを聞くことにて牙澄さぎすむ

の義ぎ

さくりいた 家屋いえの周圍まわりに打附うちつけたる板いたのこと

にて割板わりいたの義ぎ

さるまぎ 大角豆おほかくまぎの訛し

さしわ 襤まらちのことにて布ぬのの足たらぬ所ところを補おぎなふ故

挿和さしわといふ

さじる 物を涎よだめことにてなめづる又はしやぶ

るなごともいふ

さつこい 冷ひやつこいの轉訛てんしにて物ものの冷ひやなるをいふ

さなむ 物ものを玩弄あそぶことにて呵責あいなの義ぎにいふは

非ひなり

さばち 井いんばちのことにて皿鉢ひらひちの義ぎ

さどくる 目めを閉しづることにて盲人めくら即座頭すざとうの

如き故座頭ござとう暗くらといふか

さぶい 寒さむいことにてふは韻通うんつうひに變へんず

さふみづ 米磨水こめぐすりのことにて種々しゆしゆの物ものを雜ませ

て牛馬うまの飲料みんとなす故雜水ざいすいといふ

さんじやく 兵兒帶へいごおびのことにて三尺帶さんせきおびの略語りやくご

さんと 産婦さんぶのことにて産うをしたる人故産人さんじん

といふ

さんじやくじや 物ものの散々さんさんに毀これたることを

いふ

さんごたち 牛馬うまの股骨またほねの關節くわんせつのはづれ落ち

たることをいふ

し の 部

しこの發音困難はつおんこんなんなる故一種いっしゆの符號ふごうを附つけて

長しといふ

じこ 肥料じこのことにて植物しよくぶつの食じとなる故肥料じこ

といふ

しこつき 醜姿のことに醜體の義  
 ししうな 四升鍋の略語  
 ししろ 材木のことに材木は資本金の代となる故資代といふか  
 したみ 櫛櫛實の詛  
 したふき 雑巾のことに板の間を拭く故下拭といふ  
 しつこ 小便のことに濕の詛か小兒語  
 しばらしい 騒いことに叱り拂ひたく欲する故叱拂欲しいの義か  
 しどめ 蔀の詛にて神社佛閣又は高貴の家などにある日よけ又風雨を防ぐに用ふる戸をいふ  
 じなる 蟲の鳴くことに怒鳴の轉訛  
 じだいたもしろくない 實に或は甚面白くないの義  
 じふねん 桂胡麻のことに香氣甚しく十年

間も失せざるより十年といふか  
 しびと 爐のことに火熱の詛此の地の風習として葬式後身體を清むるに火を踏む故に死人といふ然し死人の義にいふは非なり  
 しびたれ 客齋の詛にて人を罵詈する語又犬猫などの寝小便することにもいふ  
 しほぎ 鹽入箆のことに鹽を入る器故鹽器といふ  
 しほみ 苗代の肥料となす草木の嫩葉のことに採れば忽ち萎故萎といふか  
 しばり 大根下を搾りたる汁のことに搾汁の略語  
 しほりばら 瀉腹の詛にて大便の通じ悪く時々痛む病をいふ  
 しばれる 寒きことに身を縛る、が如き感覺ある故しばれるといふ  
 しもる 染の轉訛にて即染込の意より酒が染

なぞ、いふ  
 じやっこばり 釣針のことに種々の魚を釣る故雑魚針といふ  
 しまった 仕損のことに爲挫の轉訛  
 じやっぴ 水彈のことに其水を弾く音により名附たるか又水鉄砲ともいふ小兒語  
 しゃくわん 左官の詛にて壁を塗る人をいふ  
 じやんばあたま 散切頭のことにて袖に類する朱變に似たるより朱變頭といふか  
 じや／＼さま 人の妻を尊稱する語なり  
 じよ 鹽の詛  
 じふもんじ 四辻のことに道路十字形なれば十文字といふ  
 じょうで 牛尾菜の詛にて山野に自生する蔓草にて食用に供す  
 じよる 居間のことに平常起居する所なれば常居といふ

しみばれ 凍瘡のことに寒さに逢ひば手足が凍み腫る故凍腫といふ  
 しみから 凍たる地面のことに凍體の義より轉じたるか  
 しんべゑ 藁靴の一種にて新兵衛の作か或藁心作の義か  
 しひた 糞のことに穀物の實らざるものをいふ  
 しんぺん 物事を綿密にすることにて測り知れざる神變不思議の義か例へばしんぺんに考へたなぞ、いふ古俗  
 じりける 小雨の永降することにて濕氣の除々するよりじりけるといふけるは助語  
 しらはい 鱈のことに色白き故白鱈といふ  
 じんじやう 人形のことにて人狀の義

すの部

す すの發音困難なる故一種の符號を附して  
 結びすといふ  
 すかんこ 酸醬草のことにて春黄色の花咲き  
 味甚酸き故すかんこといふ  
 すがわり 豌豆のことにて春早く氷を割りて  
 種子を蒔く故氷割といふ  
 すさわきとはる 物の透過ことにて透さて明  
 かなる故透明通といふ  
 すくだまる 物に恐れて竦縮ことにて即すく  
 まるの訛  
 すげる 据るの訛にて及物などを鞘に納むる  
 ことをいふ  
 すけへ 好色のことをいふ  
 すごろ 葦萱などにて編みたる簀のことにて  
 簀薦の訛  
 すっぱね 跳即泥穢のことにて泥の裾に跳ね上  
 る故裾跳といふ

すつぱり 末のことにて尻の訛か例へばすつぱ  
 りより何番目など、いふ  
 すつかい 酸の訛にて梅酢などの酸きことを  
 いふ  
 すててんこ 東京のちんくもがくのこと  
 にて片足にて兎の如く跳ぬる小兒の遊戯を  
 いふ  
 すなぐる 選の訛にて藁などを擇り分くるこ  
 とをいふ  
 すご 池沼などの水の田堰に落つる水門のこ  
 とにて水門或は水道の義か  
 すばさみ 端折ことにて裾の端を折り帯に袂  
 む故裾袂といふ  
 すまき 親族のことにて血統を互に引き居る  
 故筋族の義にいふか  
 すみすご 炭俵のことにて俵は多く茅簀にて  
 造る故炭簀籠といふ

すの 篩のことにて古澗水壺に馬の尾を用ひ  
 たる故尾壺といふ  
 すぶ 袷の刺子をいふ蝦夷語  
 すぶり 上衣のことにて上衣を着れば委善く  
 見ゆる故素振といふすぶりはそぶりと同じ  
 きか蝦夷語  
 すりつけぎ 燐寸(英語)のことにて磨りて火  
 をつくる故磨附木といふか  
 すねから 膺のことにて膺體の義

せの部

せ せをへど訛ること多し例へば書かへて讀  
 まへて蟬煎餅等の如し  
 せいろう 穀物を貯藏する槽のことにて井形  
 に重ぬる故井樓或は蒸籠の義か  
 せいら 痰癢持のことにて痰の咽喉より出づ  
 る音により名附たるか

せさしろ 水田堰のことにて堰代の義代は田  
 の廣さを量る語なり  
 せごろいわし 背黒鱒の訛  
 せごづく せごづくの轉訛にて物事に寛大な  
 らぬ行をいふ  
 せつぱり 僂僂のことにて脊のかがまりたるも  
 の故脊張といふ  
 せつない 苦きことにて一寸の時間も苦痛を  
 除きたき故刹那の義にいふか  
 せつかいた 背板のことにて馬の背のみねにな  
 りたるが如き狀故背架板といふか  
 せつちよはく 難儀することにて骨折に對して  
 折腸吐の義にいふか  
 せんたくがよい 立派なる物着のことにて着  
 物は屢々洗濯する故洗濯がよいといふ  
 せんぼんつき 地平即地形のことにて多人數  
 棒にて土を突く故千本突といふ

せんこき 稻扱のことにて稻を剪り扱く故剪扱といふか

せなかあてもち 麥の粉にて製したる餅のことにて砂糖黄粉などをつけて食ふ

その部

そだ 其方の略語

そだすけぬ 夫故の轉訛

そで 戸外のことにて外出の略語

そじよすい 涼いの訛

そっぱい 鹽辛の轉訛

そははつと 蕎麥切のことにてはつとの義ははの條に詳なり

そらしばたけ 荒地のことにて耕作せざる故

空畑といふ

そらまぎ 引窓即天窓のことにて屋根に開きたる窓故空窓といふ

たの部

たいご 物の相等しきことにて對互或は碁の勝負なきより對碁の義にいふか

だいご 大根の訛

たうさいご 馬子のことにて其の年に生れたる故當歳子といふ

だねだ 何方のことにて誰だの訛

たかあし 竹馬のことにて高足或は驚足ともいふ

たかみ 土地の高き所のことにて高見の義

たぐる 皮を剥ぐことにて手にて剥ぐ故手繰といふか

たくさる 串刺して人を笑はしむるとをいふ

たごどつく 戲言の略語にてたはけたること

たごぼち 紋羽帽子のことにて章魚の頭に似

たるより 章魚帽子といふ

たうちざくら 辛夷のことにて田を耕す時花

咲く故田打櫻といふ

たすこ 禪の訛にて又たすけともいふ

ただ 父のことにて父の轉訛又ごともいふ

たちご 雛鳥のことにて巢より立ち故立子の略語といふ

だちんつけ 馬夫のことにて駄賃を取る故駄賃附といふ

だつこはぬける 脱肛のことにて脱肛抜の義抜

は重語なり

たてまい 家の桂建のことにて米相場の標準

をつくる 建米の義より轉じたるか或は茶の湯の立前の義か

たなもの 種物のことにて穀物の略語店物に

いふは非なり

たなく 物を持つことにて擡の轉訛

たなまへかせぎ 臺所稼のことにて臺所には

戸棚などある故棚前稼といふか

たばこり 煙草入の訛

たひ 野原のことにて山なく平なる故平の略語にいふか

たふれる 疲勞たることにて斃るるの義にいふは非なり

たふは非なり

だまごどり 御手玉取のことにて玉ご取の義

こは附語なり

だんま 牝馬のことにて多く荷を負ふ故駄馬

といふ

だんぶり 蜻蛉のことにて暖氣になれば羽を

振り飛ぶ故暖振といふか

だふれ 人の訪問に挨拶することにて答禮或

は通れの義か

ため 見當違のことにて眞直を見ずして他を

見る故他見或は他目の義か

たもで 田甫のことにて田面の義農家語  
 たや 別宅或は別荘のことにて田を守る田屋  
 の義より轉じてたやといふか  
 だらひれ 鏡入のことにて弗入の轉訛弗は英  
 語なり  
 たねる 尋ねるの略語にて物を捜すといふ  
 たらづく 垂下ことにて物の下に垂れ着く故  
 垂着の義にいふ  
 たらはば 樅木のことにて山野に自生する直幹  
 刺ある灌木をいふ  
 たらづみ 俵積の略語  
 だるま 不倒翁のことにて達摩の形に造り  
 たる人形故達摩といふ  
 たまみそ 味噌のことにて豆を煮潰して玉と  
 なし暫く吊し置き然る後鹽を搗き雜せて製  
 する故玉味噌といふ

ちの部  
 ぢくなし 臆病者のことにて意氣地なしの轉訛  
 ぢくどり 翡翠のことにて岩穴或は土窟な  
 ぎに巢を作る故地獄鳥といふ  
 ぢゆうばち 飯鉢のことにて重鉢の義  
 ぢゆう 重箱の略語  
 ぢちかまる 縮の訛にて物の短く小さくなる  
 状をいふ  
 ぢやうこま 小の訛  
 ぢやうのくち 家の出入口のことにて常に出入するより城の口或は錠の口といふか  
 ぢやうや 吃度のことにて物の確に間違なきと定りたるか如くなる故定也といふか  
 ぢやうべつと 些の訛にて物の僅なることをいふ  
 ぢやうへい 兵卒或は兵士のことにて徴兵の義にいふは非なり

ちよくちらめく ちよくちの訛にて心落ち着かぬ状をいふ  
 つの部  
 つの 發音困難なる故一種の符號を附けて丸つといふ  
 つかみ 錠のことにて手にて物を握むが如き状故掴といふ  
 つけき 接木のことにて臺木へ他の木を附くる故附木といふ  
 つこのひ 翌日の訛  
 つめいぬ 牝犬のことにて雄犬を集むるこり集犬といふ  
 つっぱり 支柱のことにて物を支ふるに穴き張る故突張といふ  
 づっぱり 物の澤山なることにて器物に突き張り餘る意より突張といふ

づの 釣糸のことにて天蠶絲をいふ天蠶絲は引き延すことを得る故衝延の略語にいふ  
 づのだし 蝸牛のことにて時々角を出し食を求むる故角出といふ  
 づばくら 燕の訛  
 づぶけ 人を馬鹿にする語にてすげの義か  
 づぼまい 庭園のことにてかこかに圍まれたる前栽故庭前栽の義にいふか  
 づまご 藁靴の一種にて足の爪先を籠る故爪籠といふか  
 づみつくり 懲然なることにて自ら罪を犯し、意より罪作とふか  
 づんぐり 獨樂のことにて旋廻の義古語  
 づんぐりかぶ 天王寺蕪のことにて形獨樂に似たるより旋廻蕪といふ  
 づらと 毎度或は度々などいふことにて連度の義か



つらつけない 鐵面皮のことにて何事も耻と思はぬ故面貌ないの義或は面憎の轉訛か

ての部

てやくばば 産婆のことにて女の天役を果さしむるより天役婆といひ或は手をかけ産さしむるより手掛婆といふか  
てがら 蝶のことにて婦人の髪飾に用ふる手絡に似たるよりてがらといふか又所によりてはてがらといふ  
てぎ 柏子木のことにて手木即十手の義にいふは非なり  
てざる 出ることにて物の出来義にいふは非なり  
てこね 物の大なることにて手の肥れたる意より手肥といふ  
てしば 巻鬘柴の略語にて手柴の義

てっかい 手の不具者のことにて手の状鐵拐の如き故てっかいといふ  
てつまる 物の詰ることにて出るに詰る意より出詰といふ  
てつぼそで 筒袖のことにて鐵砲に似たるより鐵砲袖といふ  
てっぺんぶくる 頭巾のことにて頭上に冠る故天邊袋といふか  
てつねけ 仕事の出来ぬものを罵りていふ語にて巻坂の轉訛か  
ててこっけ 蒲公英のことにて多く路傍などに生じ菊花に似たる植物なり  
てごがよい 手際がよいの轉訛にて仕事に上手なることをいふ  
てぬげ 手拭の訛  
てんのり 田植休即豊作を祈ることにて天の祈り或は天の利の義にいふか

てんげ 山の頂のことにて甚險しきより嶺險の略語にいふ  
てんど 漁船の大なるものにて天幕(英語)を用ふる故てんどといふか  
てはる 出ることにて出張の義  
てのぼた 紙鳶のことにて高く天に揚がる故天の旗といふ  
てもの 腫物の略語  
てろ 泥の轉訛  
てゐる 座敷即來客を通す間のことにて出居の義古語

ごの部

ごぼら 腹のことにて身幹の胸にある故胸腹といふ  
ごうたりかうたり 如何でも斯でもの訛斯は斯の音便なり

ごうやすけ 如何するか  
ごたりごたり 重さりの訛にて重き物の上より落つる響をいふ  
ごきたら 把薬のことにて鍋釜などを曬さみかく故礮把薬の略語にいふ  
ごぐすり 火薬のことにて飲めば毒ある故毒薬の略語にいふか  
ごちばめる 袋などの口を締むることにて閉窄の訛にいふか  
ごくりと 篤どの訛にて念を入る、故確どの意にいふか  
ごっぴき 賭博の一種にて鏡に絲を結び多人數集りて一同に引く故同引或は撞引といふか  
ごくりかへる 傾覆のことにて物の顛倒になることといふ  
ごちやげる 取揚の訛にて物を取り揚ぐることといふ

どつつかる 取着的訛にて物に取り着くことをいふ或は取着的の義か  
 どうてん 喫驚するに物に驚きひっくりかへる如くなる故倒顛といふ  
 どささま 月のことにて父を天とし母を地とす父天にある故父様といふと、は父の轉小兒語  
 どごこ 蠶のことにて蠶卵は魚卵に似たるより魚子といふ魚をど、といふは韃靼語より出づ  
 どごまわり 舊四月八日十ヶ所の神に祈願すれば幸福を得るといふ十所詣の義  
 どな 牛馬の飼料のことにて穀草を以て馴鹿を飼養せしより略してどなといふ  
 どだちさま 士族のことにて昔貴族の供に徒にて従ふを徒立といふ之を音讀して徒立といふか

どしな 注連繩のことにて年の始めに注連繩を飾る故年繩の略語にいふか  
 どび 消防夫のことにて鳶口を持ち火を消す故とびといふ  
 どべぎけ 酒粕を水に溶し飲料となすものに酔酒の義  
 どや 銅釜の製造所のことにて多く土間を使用する故土屋といふ或は銅屋の義か  
 どまづく まごつくの轉訛にて物に惑ふことをいふ  
 どんころ 松杉などの丸太のことにて未だ削らざるを以て轉ぶこと鈍き故鈍轉の略語にいふか  
 どんやく 休日或は日曜日のことにて蘭語に出づ  
 どりこしば 小楊子に造る黒文字木のことにて香氣甚しく鳥不止故に鳥柴といふこは

な の 部

附語なり  
 どりける 取片附の略訛  
 とりのけつちやか 雞冠のことにて雞の毛冠の訛  
 ながべろい 物の長さことを形容する語にて長細の訛  
 なかご 媒介人の略語にて結婚の仲立をする人をいふ  
 なさべつちよつくる べそかくことにて小兒の泣顔することをいふ  
 なしろ 苗代の略語  
 なたでもない 何でもないの訛  
 なたね 油菜のことにて此の菜種より油を搾り取る故菜種といふ  
 なづき 額のことにて腦の義にいふは非なり  
 腦は古語

なで 雪崩の轉訛にて雪の高所より崩れ落つることをいふ  
 なにすけ 何爲かの訛  
 なんばん 蕃椒のことにて足利時代西洋より渡來せる人を南蠻といひしが後に物名に添へていふ語なり  
 なめ 山椒の粉を河中に投じ魚を白刺して捕ふる故なめといふか或は滑して捕ふる義かなめくちり 蛞蝓の訛にて蝸牛に似て殻なき蟲なり  
 なにもさないで 何も爲ないの訛  
 なぶさ 青大将のことにて色青く形大きく長三四尺に至る無害の蛇なり  
 なまかも 何彼の訛にて如何も斯うもの義か  
 に、ぬの部  
 ながはい 目高魚のことにて腸苦の故苦鱈と

らふ

にくつらい にくらしいの訛にて其面憎き故

憎面の義にいふか

にし 鯉の略竊に似て稍大なる魚なり

にしようきもの 新しき着物のことにて新着物の義

にじかむ 物の皺になることにて蹂躪の義に

いふか

にどいも 馬鈴薯のことにて一年に二度收穫

する故二度薯といふ

には 屋内の地板なき土間のことにて庭の義

にはじまひ 穀物の收穫のことにて庭(土間)にて穀物を消化故庭仕舞といふ

にらみざかな 婚姻宴席の取肴のことにて其儘手を附けずに置き四方より睨む故睨肴といふか

にぞこる 荷造することにて荷を堅く造る故

三三

荷を凝るといふ或は行李の義か

ぬかりたぶ 泥濁のことにて泥濁溝の義

ぬきたまる 温まるの訛にて暖をとることをいふ

ぬすど 盗人の略訛

ぬさる 乗の轉訛にて例へば汽車にぬさるな

ぬいふ

ぬべり 濃厚の訛にて女が白粉などを顔にあ

つくことにつけたる状態をいふ

ね、の、の、部

ねこづき 根扱の訛にて樹木を根ながら抜く

ねたがる 嫉妬のことにて憎しと思はしむることをいふ

ねつめし 挿木のことにて樹木の枝を地に挿し根を生せしむる故根挿といふ

ねづばる 粘の訛

ねつらくする 愚痴くの訛くづくのことにて物事に躊躇することをいふ

ねずみつくり 癩痢病者のことにて鼠の震懼するが如き状をなす故鼠作といふ

ねもち 炭餅のことにて炭の根より製する故根餅といふ

ねまる 坐ることにて踞の轉訛或は寝の義か

ねんじん 胡蘿蔔の轉訛

ねばし 真綿のことにて粘り着故粘しといふ

ねぶりかき 居睡のことにて眼揺の義ひは韻通ふに變ず

のぎ 軒の訛にて芒と混すべからず

のこ 鋸の略語

のじ 虹の轉訛

のっぺり 雪などの一面に地上に積りたる状に

らふ

のぎへ 咽吭の訛

のべこら すべこらの轉訛にて物の滑かなることといふ

のべろ 寄來のことにて物を送り來す故延ろ

といふか

のぼる 物を踏とにて物に上る故上るといふ

のめくる のめるの訛にて體の前方に倒る、

ことをいふ

のらつき 懶惰者のことにて何事もせずなま

けあるものをいふ

のりがへ 糊着のことにて着物を洗濯して糊

を着け張り替ふる故糊替といふ

は、の、部

はいも 里芋のことにて一根より許多の新根

の小塊を生ずる芋にて其の葉の大なるより

葉芋といふ

ばい 草木の幹或は根より新しき枝の生ずることにて胚或は枝数を増すより倍の義にいふか  
 ばうす 兒童の總稱にて坊主頭の義  
 はきだめ 芥溜のことにて芥を帯にて掃き溜る故溜の義  
 はご 羊の轉訛にて物事の何れともつが半らなることをいふ半端奇数の義  
 ばくる 品物を交換することにて馬を賣買する馬喰の義より轉じたるか  
 はしん 衣服を裁縫することにて針を把る故把針といふ  
 はしらく 燥の訛にて物の乾くことをいふ  
 はしのたもと 橋の根或は橋の際のことにて橋の手許の義  
 はせ 入手の訛にて稻麥などを懸け乾す竿をいふ

はだ 鳥獸などの親のことにて羽合或は母肌  
 の義  
 はたけまき 種蒔のことにて島に種子を蒔く故島蒔といふ  
 はたきまはる 騒ぐことにて働く意より働廻るといふ  
 はたよしも つくねいものことにて肌滑かなる故肌善芋といふ  
 ばち 蜂の訛にて撥と混すべからず  
 はと 麴類のことにて旅行出發の際麴類を糶したる故發途といふか  
 はったき 蝗のことにて稻の葉を食ふ害虫の一種なり  
 はちちやがる 張揚或は彈揚の訛にて物の跳ね揚ることといふ  
 はたかぬぎ 肌脱の訛にて裸脱の義  
 はっぱ 草木のことにて葉端の義

はったし 跣足の訛  
 はな 澱粉のことにて白き花の如き故薯の澱粉族の澱粉なごといふ  
 はなばし 鼻前のことにて鼻の端なる故鼻端といふ  
 はなぐれ 鼻繩の訛にて牛の鼻穴に通して引く繩をいふ  
 はないた 胡瓜や南瓜などの成り始めたるときにて始めたるの義か  
 ばば 大便のことにて小兒語  
 はひまる 這ことにて這廻の略語  
 はばきぬぎ 歸宅祝のことにて旅行より歸り脛衣を脱ぐより脛衣脱といふ  
 はんか 人を愚弄することにて智識の充分ならぬ所より半開或は半可といふか  
 はますか 濱邊のことにて濱洲河の義  
 はままし 輪廻の略語にて昔は破魔とて輪を

轉ばし 弓矢にて之を射て互に勝敗を争ひしが今は木の丸太を横に切り輪に代へ廻し遊ぶに至る小兒遊戯の一種  
 はんちや 半纏のことにて半身に着る故半着といふ  
 ばんかい 落臺のことにて葉の甚大なる所より落臺といふか  
 ばんげ 晩景の略語にて日の暮方をいふ  
 ばんぢやう 物の値踏することにて物價の高低を判じ定むる故判定といふ  
 はやつけき 物を競争することにて早の義か  
 はやつけき 燐寸のことにて火の早く附くより早附木といふ  
 はらびた 孕ことにて腹肥を太る故に腹肥大といふ  
 はらびり 下痢のことにて腹より糞を放るより腹放といふ

はらつあい 満腹のことにて大食して腹通り  
 悪しき故腹通隘といふ  
 はりのみづ 針の目途の訛  
 はるき 薪のことにて多く春樹木を伐採して  
 薪どなす故春木といふ  
 はねり 蘭にて作りたる編笠のことにて其編  
 方羽毛を織りたるか如き状故羽織といふか

ひの部

ひ ひを往々訛りてふと稱ふ例へば火箸人等  
 の如し  
 ひかき 十能のとにて火を掻く故火掻といふ  
 ひかた 西南より吹く風のことにて日方の義  
 古語  
 ひぎ 便宜の略語にて音信のことをいふ  
 ひこたこ 物の不釣合なることにて跛の義跛  
 をびいんさふ

ひご 肌着洋服などに附くる鈕釦のことにて  
 鈕釦は葡萄牙語なり昔鈕釦なき時籤を用ひ  
 たるよりひごといふか  
 ひたて 小兒を背負ひたる上に懸る着物のこ  
 とにて被垂或は直垂の義か  
 ひだりばら 左側の訛にて左腹の訛義  
 ひちつり 肘のことにて肘吊の義  
 ひちよぐ 拉の訛にて物を押し碎くをいふ  
 ひくこい 低いの訛  
 ひつた 小女の總稱にて姿美しき故美體といふ  
 ひつぎ 蟻のことにて又赤子のことにもいふ  
 ひつて 引手の訛にて唐紙筆筒などの開閉に手  
 をかくる所をいふ  
 ひつちぎり 摘入のことにて小麦粉を捏り手に  
 て拗断汁に入れて煮る故引拗断といふ  
 ひつづく 粘着のことにて引き着の意より引着と  
 といふ

ひっかり 引吊の訛にて火傷などにて皮膚の禿  
 けて光る故ひかりといふ  
 ひとてな 一房といふことにて例へば葡萄ひ  
 どてななどいふ  
 ひとすがひ 一番の訛にて鳥獸などの雌雄一  
 對をいふ  
 ひんど きちんどの轉訛にて戸障子などを  
 確たつる時にいふ  
 ひやげ 提子の訛にて酒を盛りて盃に注ぐ器  
 をいふ  
 ひや 室の轉訛  
 ひやしぶり 久振の訛にて久しく時を歴たる  
 ことはいふ  
 ひんばうたかり 貧乏のことにて貧乏集の義  
 ひよう 寄生木のことにて梨櫻などの枝節の  
 間に生ずる特種の枝葉の如きものにて又は  
 やごもいふ

ふの部

ひらこ 崖或は坂の勾配の急なる所のことにて  
 平なる故平處といふ  
 ひろ 野蒜の訛にて山野に自生して葉は葱に  
 似て甚細長く臭氣ある草なり  
 ひる 蛭の訛にて池沼などに生じ血を吸ふ蟲  
 なり  
 ひるこ 蛾の略語にて蠶の蛹の化したるもの  
 をいふこは附語なり  
 ひるま 晝の訛にて晝間の義

ふ ふを往々ひと稱ふ例へば二人御振舞等の  
 如し  
 ふかし 赤飯のことにて糯米と小豆とを合せ  
 蒸籠にて蒸す故蒸といふ  
 ふきがふく 吹雪の略語にて雪の風まじりに  
 吹くことをいふ吹くは重語なり

ふきまける 小鳥などの鳴き負くることにて  
吹き負くるの義

ふくだち 若菜のことにて春莖立ちて花咲く  
故莖立といふ

ふくろぐさ 辨慶草のことにて春厚緑色の葉  
を生じ秋五辨の小白花を開く草なり

ふさかぶ 膝頭のことにて俗に膝株といふ  
ふしんがみ 色紙のことにて書物の知らざ所  
に貼る故不審紙といふか

ふた 物事の特別なる時に使ふ語にて分だの  
義

ふつける 吹附の訛にて物を吹くことをいふ  
ぶくらせる 毆打することにて拳を打喰はするの  
義か

ふたぶつ 物の倍なることにて二倍の義  
ふんぞりかへる 踏反とてかへるは重語なり  
ふんじばる 縛ることにて踏縛の義みは音便ん

に變ず  
ぶんぶ 紙鳶の風箏のことにて多く鯨鯨藤蕈  
などを用ふ  
ぶんとなげる 物を投ぐる形容詞をいふ  
ふるしき 風呂敷の訛

への部

へを往々さと使用す例へば山さ行く馬さ  
乗る等の如し

へいてけろ 言ふてくれの訛にて他人に傳言  
を頼むことをいふ

へいくらへ 人を馬鹿にする語にて屁喰の義  
へいは 物の澤山なることをいふ

へいご 牛のことにてへいこは其鳴聲により  
名附たるか

へそび 鍋墨のことにて多く鍋の臍に溜る故  
臍墨の義にいふか

へだへで 夫れ故といふことなり  
へちよした 氣絶することにて息をつくこと  
能はざる故閉息したの義か

へちよ臍の訛  
へかどねまる へかりと坐ることにてど  
かりとは重き物の高所より落つる状にいふ

べつたら 人糞のことをいふ農家語  
へとむ 陷の訛にて物の窪むことをいふ

へびた 鯉(赤鯉族)のことにて形圓く扁く口  
は領の下につき尾細長くして刺ある魚なり

へなし 縁なき座のことにて縁無の義  
へぼ 水痘のことにて又みづいともいふ

へみし 神飯の轉訛  
へんちん 雪隠の轉訛にて大便所のことをいふ

べんざいもの 菓子のことにて之を賣りて財  
を得る故辨財物といふ

へら 夫より年増の妻のことにいふ

へらからい 物の酸ことにて辛く苦く喉を突  
くか如き味ある故變に辛い義にいふか  
へらまひ 飯の不足したる時にいふ語にて籠  
舞或は籠擔の義か

べらかぎ 走書の轉訛にて草書平假名など引  
き續けて手早く書くことをいふ

べろ 涎のことにて舌の義か  
べろと 氣抜したる状にいふことにて酒酔の  
べろくの義より轉じたるか又暫しの間に

喰ひ盡したる状にもいふ  
へれる 入るるの轉訛

ほの部

ほいと 乞兒のことにて元來佛家にて飯米を  
陪堂といひしより轉じて米を乞ふ者をほい

とといふ古語

ぼう 追ふの轉訛にて人や犬などを追ふこと  
をいふ

ぼくと 棒のことにて木刀の義

ほげ 棹のことにて帆柱の上に横に亘す桁に  
て帆を懸けて張るもの即帆桁の訛より轉じ  
てほげといふか

ほざける 頭髮の亂るることにて解の轉訛か

ほさま 盲人のことにて多く坊主頭故坊様と  
いふ

ほたろ 蝨の訛

ぼたされる 追出さるるの轉訛にて例へば家  
を追ひ出さるる、なご、いふ

ぼつ 手足の指の火傷などして圓くなりたる  
をぼつ、足ぼつ、こ手など、いひ又錐などの鈍  
まにいふ

ほかけ 草木などに培ふことにて土を掘り掛

くる故掘掛或は切掛といふ

ぼつきり 棒のことにて棒切の訛

ぼつべた 頬のことにて頬の邊肥む太き故頬邊  
太といふ

ぼつぼ 着物のことにて懐の義にいふか小兒語  
ほつないうちもなしの轉訛にて次第もなし  
或は混雜などの義にいふ

ぼつばら 腹のことにて魚腹の鯉の義にいふか

ぼつち 帽子の訛

ぼつと 襤褸の訛

ぼとけかき 法事のことにて佛を供養する時  
卒塔婆を書く故佛書といふ

ぼとけづくる 稲や麥の莖中に穂を形造るこ  
とにて穂作義

ぼまくる 追遣のことにて追巻の轉訛

ぼんばな 桔梗女郎花などのことにて手闌盆  
に咲く故盆花といふ

ほんにやくら 難有のことにて他より物を貰ひ  
たる時などに禮することといふ本懐 至或  
は本如意の義か

ほんぐ 反古の訛にて文字を書きたる紙をい  
ふ

ほねから 骨のことにて骨體の訛

ほろく 散ぐの略語にて物を打落すことといふ

ぼろくそ 痘痕のことにて顔の醜より襤褸屎  
といふ

まの部

まうり 甜瓜の略語にて又あまうりともい  
ふ

まかなひ 上衣のことにて身體を巻く故巻合  
の義か蝦夷語

まかたしない 間合ぬのことにて仕事して賃銀  
の少き時などにいふ

まび 長押の上又は腕などに設けたる棚のこ  
とにて間木の義か

まさ 血統のことにて族の訛

まくらへ 喰へのことにて眞喰の義

まける 物を覆すのことにて撒の活用語か

まじほい 眩の訛にて日光や燈火などを見て  
眩のことにいふ

またぎ 獵夫のことにて古鐵砲なき故木の叉即  
又木を以て獵具となし、かまたぎといふか

まだのき 料木のことにて多く皮を剥きて綱  
繩を作す

まぢろ 待ての訛にて人を待たしむる時など  
にいふ

まつかつちや 松毬の訛にて松の實をいふ

まちぶしい 待遠の訛にて人を永く待つ時な  
どにいふ

まつやね 松脂の訛  
まづべる 集むるの轉訛にて物を集むること  
をいふ

まつか 坂或は崖の峻険所をいふ

までだひと 儉約なる人のことにて眞手人に

いふは非なり眞手人は正直なる人をいふ

まどり 又木にて造り穀物を消化す農具の一

種をいふ

まなく 眼の訛

まなくみる 讀み書きの出来とにて眼見の訛

まはりかせ 旋風のことにて風の廻り吹くよ

り廻風をいふ

まや 腋の略語

まま 祖父のことにて乳母の義より轉じたるか

まよる 物を償ふことにて古語の償の轉訛か

まらめ 榎梓の略語

まるとば 車前草のことにて多く路傍に生じ

葉圓く穂をなして淡綠色の細花を開く又か  
へるばともいふ  
まんさく 福壽草のことにて此の花の盛に咲  
く時は豊年なる故満作といふ

み、む、めの部

みし 飯の訛

みちかこい 短いの訛

みづくらひ 水に溺るることにて水を呑む故

水喰といふ

みぐさい 醜いの訛或は見苦しいの轉訛か

みづけしき 水氣のことにて水分ある故水氣

色といふ

みぎばら 右側のことにて右腹の義

みづまし 洪水或は出水のことにて水嵩を増

す故水増といふ

みそばさみ 鶴鶴の訛にて形雀に似て小さく

灰色にて黒と褐色との班ある鳥なり

むさい むそいの訛にて薪炭などの永く保つ

ことをいふ

むじり 筒袖に仕立たる尻無の着物故無尻と

いふ

むしくされ 蟲喰のことにて桃梨などの蟲喰

より腐る故蟲腐といふ

むすける 卵の孵化のことにて産すは活用語け

るは助動詞なるか

むしぼひ 舊六月廿四日農夫等惡蟲退散祈願

成就など書ける旗を立て笛太鼓の調子に

合せ畠道を廻り蟲を追ふ状をなす即蟲追祭

なり

むつたり 確との轉訛にて一生懸命或は一心

不乱などいふ語なり

めそ 味噌の訛

めくらぶだう 野葡萄のことにて實は盲人の

眼球に似たるより盲葡萄といふ

めごい 愛の訛にてかはいことをいふ

めごち 河童想像動物のことにて水中にあ

りて人を捕ふる故冥途地の義にいふか

めごちのさら 紅海盤車のことにて河童の皿

に似たるよりめごちのさらといふ

めごこ 片目又めごちのことにて目一つなる

故目孤の義にいふか

めつか 牝牛のことにて牝鹿の義より轉じたるか

めらし 小女のことにて女童の略語

めをひくる 眼ることにて目を閉づるの轉訛か

めめす 蚯蚓の訛にて土中に棲む蟲なり

もの部

もくる 草木などの根を抜き取ることにて振

の義

もぐらもち 殿鼠の轉訛にて形鼠に似て土中



にすむ獸なり  
もぐら 葎の訛にて垣根などに生ずる蔓草を  
いふ  
もくく むくくの轉訛にて物の高く起る  
状にいふ  
もごろ 明年即來年のことにて迎填の義  
もだい 重の訛にて物の重きことをいふ  
もたせぶり 物體振の訛にて知りて知らざる  
状にいふ  
もち 鶺鴒の略語にて小鳥を捕ふるに用ふ  
もちあみ 四つ手網の事にて竹を弓の如くま  
げて網の四隅を張り魚を捕ふるをいふ持網  
の義  
もちよこい 握の轉訛にて肌或部に手を觸  
れ一種の痒みやうなる感じを起すことをいふ  
もちやびる 持上の訛にて擡るの義  
もちよる 振の訛にて身を他に避け座を讓る

ことをいふ  
もごもごの訛にて物を追求することを  
いふ最の義  
もごり 茶碗酒のことにて茶碗に盛りたるま  
、故盛限といふ  
もんべ 股引の一種にて袴の如く仕立脚部を  
狭くして細き縁を附けたるものをいふ  
もつく むすくの轉訛にて無作法に物を  
喰ふことをいふ  
もつさり 鬚髮などの多く生ひたる状にて茂生  
の義か  
もつた 妊娠になりたることにて子を持たの略  
語か  
もづす 蓄微藪のことにて糸の絡れたる状故  
絡の義にいふか  
もとせ 細引即麻繩のことにて元結の義より  
轉じたるか

やゆの部

もしろい 面白の略語にて心の喜はしきこと  
をいふ  
もす 燃すの略語にて竹木などを火に焚くこ  
とをいふ  
もよる 化粧することにて美しく飾る故模様  
留といふか  
もよぎ 萌黃の訛  
もそく 粗糙の轉訛にて手觸のあらくし  
き状をいふ  
ものもち 金満家のことにて種々の財産を持  
ち居る故物持といふ  
もまた 股のことにて股の所稍太き故股太と  
いふか  
ものもっひ 乞食のことにて種々物を貰ふ故  
物貰といふ  
もりがもる 屋根より雨滴の漏ることをいふ

やくじやもの やくごもの、訛にて無益者或  
は厄邪者の義か  
やくご ことごとく或はわざとのことにて無益  
の訛か虚言にいふは非なり  
やけばた 火傷のことにて肌の焼けたるより  
焼肌といふ  
やしかける 喉の轉訛にて犬などを勸め勵  
まして他に手向しむるをいふ  
やせから 瘦形のことにて身體の痩せたるよ  
り瘦體といふ  
やつこい 柔いの訛  
やつこね 芥焼のことにて芥を焼きて肥料とな  
す故焼肥料といふ  
やつかたい 吝嗇のことにて物を惜むこと彌々堅  
き故彌堅といふ

やぐくごい 物事の六ヶ敷とていやくたくし  
 しきの義にいふ  
 やで 矢張の轉訛  
 やどこ 屋根葺のことにて家は人々の住居する所故宿處といふ  
 やばしない 不潔或は汚穢ことをいふ  
 やまひがうづく 病が移るの訛にて疼の義にいふは非なり  
 やまのかみ 己の妻を謙遜して山妻といふ  
 やまびこ 山吹の訛  
 やまけし 蓮花のことにて其實罌粟に似たるより山罌粟といふ  
 やませ 東風のことにて山の背よりふく故山背風といふ  
 やまど 山稼する人のことにて山人の訛  
 ゆひこ 互に仕事の手傳をなすことにて雇人の義の古語

ゆうい いわの轉訛にて他人に對して然らずといふ意を示すことをいふ  
 ゆぶい 烟の轉訛  
 ゆつく 動搖の訛  
 ゆらだご 鞦韆のことにて綱を釣り下げ身をかけてゆりうごかすものにてゆさはりの訛  
 ゆは 岩の訛  
 ゆわし 綱の訛  
 ゆむさ 蓬の轉訛にて餅又は熟艾などを製するに用ふる草なり

よの部

よが 蚊のことにて夜出る故夜蚊といふ  
 よくたかり 慾深きことにて慾集の義  
 よこじや 横座の訛にて上席のことをいふ古語  
 よし 葦のことにて水邊に生ずる莖に枝なく竹の葉に似たる草をいふ

よてこ 末子のことにて幼弟子の義  
 よなか 豊年のことにて穀物の實よければ世の中といふか  
 よま 夜の訛にて夜間の義  
 よまごり 酒酔のことにてよまごらひの訛  
 よまごこと 苦情のことにて又禁厭ことにもいふ禁厭は神佛に祈りて禍を祓ふことなり  
 よまさ 穂持の轉外持のことにて昔子弟の落穂を拾ひ自分の稲として貯ふるより起る或は餘分に種を蒔く故餘蒔といふか  
 よめこむし 天道蟲のことにて形圓く赤色にして黒點ある美しき蟲なれば嫁子蟲といふ  
 より 百合の訛  
 より 元結のことにて紙縫にて製したる故縫とらふ  
 よりぎ 會合即集會のことにて物事を議する故寄議といふ

よしまひ 共有のことにて多人數寄り集りて物を持つ故寄合といふ  
 ようた 股のことにて膈の轉訛膈はひかがみをいふ

ら、ろ、わ、る、を、ん

ららあかないららもないの訛にて次第なく混雜或は無分別なることをいふ  
 ろうく 鳥を呼び物を與ふる語にて又しないくともいふ  
 わ 吾の略語  
 わしる 汁のことにて種々の物を雜せ煮たる故和汁といふ  
 わか 輪のことにて輪架の義  
 わっぱ 曲物のことにて多く童の食器となしたるよりわっぱといふか  
 わらし 童の訛にて小兒のことをいふ

わづかべなり 僅許の訛にて物の少

いふ

わきばら 傍の訛にて脇腹の義

るきみ 陰門のことにて異氣味の義

をかる 長火鉢のことにて岡爐の義

をらよれる 折るるの訛にて竹木などの折る

ることをいふ

をどこあつは 御轉婆娘のことにて行爲男に似

たる故男阿婆といふ

をば 尾のことにて尾の羽なる故尾羽といふ

をなき 鰻の轉訛

をま 馬の轉訛

をほけ 麻笥の訛にて麻を積み入る器をいふ

をぢ 弟のことにて叔父の義

んが 汝といふことにて人を卑下していふ語

なり 左様或は然りなごといふ語なり

左の俗歌數首は在來のものど他より入來せ  
るとあり皆何れも口碑によりて傳はれるも  
のなれば文句及意義に於て或は誤謬なきを  
保せず讀者幸に諒せられよ

俗歌

儀積の歌一

春の初に福大黒は舞ひ込んだやーさあく舞  
ひ込んだやー何を先に立てさて舞ひ込んだやー  
御惠比壽様を先に立て福大黒は舞ひ込んだや  
四方の棚を見てやればなあそれ鏡の餅は十二  
重ね神の御膳も十二前いやだいとこせいそれ  
大々飾られたよさあ何より目出度とやー  
御家の旦那様は儲出したやー何を臺として儲  
け出したやーそれ商ひ繁昌で儲け出したやー  
四方の四隅に倉立て、それ俄に身上は上りま  
すさあ何より目出度とやー

御家の旦那様は春の初の初夢にそれきとらぎ

山の楠木を船に造りて今下す

白銀柱を押し立て、それ黄金の鮮美を含ませ

て御繩繁昌で琴の絲

綾や錦の帆をかけて沖吹く風は帆にのせて寶

の嶋へ乗り込んだやー

數の寶を船に積むれば彼處の倉へ納め置くさ

あ何より目出度とやー

豊作満作續いて來い萬の寶も續いて來い御倉

に御米がたんどく

同 二

一つとせー それ日柄を擇んで參らる、七福

神の御酒宴身上あがれと飲み廻

二つとせー 福神祭るや此の家は日々身上

は上ります寶の山へと登らる

三つとせー 見事に見事は重なりて今年も豊

四つとせー

五つとせー

六つとせー

七つとせー

八つとせー

九つとせー

十とせー

同 三

年萬作で惠比壽廻るや踊るや

世にも知らる、辨天の妻持つ亭

主は果報なり子寶御寶積み重ぬ

意氣な姿の毘沙門は兜頭巾を被

ふらる、悪魔を拂ひて舞ひ遊ぶ

睦し御家に来て見れば家内は揃

ひて和合樂孫彦まで至るまで

永く守れよ七福神年寄小兒に至

るまで稼ぎ朝起き忘るよよ

屋敷周囲を見てやれば米倉金倉

同 三

是より儀を積み重ね大黒上に坐

すらん一打打てばにこくと

年の初の若惠比壽松の小枝にト

らる、

ひ込んだ舞ひ込んだやー  
 何はさて舞ひ込んだやーそれ七福神を先に立  
 て正一位稻荷は舞ひ込んだやー  
 濱は大漁岡は満作でそれ百姓商人手間取の果  
 までも喜んだやー  
 百に三升の米かはせでそれすここんこんと鳴  
 くは福稻荷  
 御家の旦那様は奥の倉へも米俵を積み重ねそ  
 れ米俵の上にて年をとるさあ何よりも目出度  
 どやー  
 春の初の年男それ福徳水の年男松と竹と  
 は寄するかそれ大々所は御俵榎栗寒作そ  
 れ大黒舞は相濟んだとやーはあ御祈禱く  
 正月のヤイ祝ねドーサイ松の葉をばヤイ手  
 に持ちてドーサイ祝ひなざるヤイものかな  
 今日日は日もよい種下しドーサイ何石何斗のヤ

イねろしてドーサイ千石千斗のヤイねろして  
 しろかきの(苗代播の略語)ヤイ白の馬ドーサ  
 イ智にさへせよヤイ取らせてドーサイ取らせ  
 るにもヤイ取らせてドーサイ花の智にヤイ取  
 らせて  
 苗取かはの(苗取河)ヤイなかのせは(中の瀬)  
 ドーサイ露も殖ゆるし取らないドーサイそれ  
 をなせに取らないドーサイかいとりあけて  
 (播取揚)取らないか  
 鎌倉のヤイ早乙女のドーサイ五月めしたる帷  
 子ドーサイかみとすそは(上と裾)ヤイ蓬草  
 蒲ドーサイ中はうづら(鶉)卵の花ドーサイ卵  
 の花はヤイ咲くならばドーサイ今はごしよの  
 (御所)ヤイ盛りかな  
 此の日那様はヤイ今盛りドーサイ四方の隅へ  
 ヤイ倉建て、ドーサイでっちらてふと(調一  
 てふとは双六賽の)目の並びたる状にふ

積んだれや  
 かどのまげしは(角屋敷の曲物師)よいまげし  
 ドーサイ入れてこいたを(鼓下の義か)た、い  
 てドーサイた、くにもヤイた、いてドーサイ  
 おんしやくくと(御紳々)ドーサイた、いて  
 楓摩のヤイどぐる殿(楓)を始めたる藤九郎  
 盛長か)ドーサイすりしな(摩り品)寄せたヤ  
 イすりよせてドーサイ諸國の寶をすりよせて  
 御年男の太郎次殿は五階の松を何處で迎へた  
 なそれがやい西の御岳の瀧の澤で五階の松を  
 迎へたな  
 御年男の太郎次殿は若の水を何處で迎へたな  
 それがやい西の御岳の瀧の澤で黄金交りの若  
 の水迎へたな  
 ねいぢよま〜と(榮女魔)ねいぢよま〜と

ん咲いたかどん忍びがどんとんどこせいやと  
 のがみさまは(殿のト様)此處は船場のさかり  
 がどん一二三四五六七八九十と一つあなたに  
 貸しましたはい借りましたねいぢよま〜と  
 つづく、  
 正月の門に門松二月あ初午三月あ御雛様四  
 月あ御釈迦様五月あおのぼり六月ああらため  
 七月あ七夕八月あおまつり九月あ月の節旬十  
 月あ御大師講様十一月あ御恵比壽十二月あ餅  
 搦  
 同  
 ひんざくる(貧坐著)三年味噌四年大根とさい  
 く赤坂下りの虎坂女房が又来てとらうとさ  
 いく女のさい(分際)の略語)とて煙草燻して  
 笹山三間焼いたとさいく(釜)鮎刀棚から落  
 して礪いでとさいく礪さめが見ねとさいく

山の柴栗よく熟んで人に拾はれて小鍋で燻られて賣られて買はれて皮をむかれて食べられたあどさい

同

どんくた、けや誰様だあれは草屋の姉様だ今頃何しに御出ました雪駄の革緒を賣りに来た赤いのと白いのと入り雜せて明日は市の日だ宿らんせ

子守歌

ねんくこやんまこしろいぬこさとのみやげになにもらふたびうびがらくまめだいこ

同

守は樂なやうでつらいものねかさしかられここにまかれ近所の子供等にいじめられ早く正月くればよい風呂敷包に下駄をへてねとさんさよならもうこないねかささんさよならもうこない

同 齋の父さま鳥の母さま雀の孫さま(こは附語)

盆歌

盆の十六日に雨降るならば寺の十文字目の(十文字目は四辻をいふ)地蔵は泣くべ

なにやとやらよ(如何したらよからう)なにやとなされて(何が何やらわからない)なにやとやらよ

是途方に暮れたる歌なりといひ又愉快極まりてうたひし歌なりといふ

咲いた櫻になせ駒つないだよ(駒勇めや花落つる)

姉こちよくらめて粥こ鍋まけたよ(まけるは覆すと)杓子あ及ばねで手でさろたよ(酒は米の水飲まねば酔はぬ飲めば甘露の味がする)高いくと高館あ高い(高館は村なり)南部入

月は目の下だよ

こはからは(草臥或は疲勞)竿にならぬか夏竿に夏は帷子そよぶ

姉こごさいく二升樽さげて所産土神の御神酒酒

朝草に刈込まれたさきりくす思ひ知らずに馬に乗る

さかるくと長者の山さかるさかる長者の山

今夜ばかり

音頭取むせたなぞだな早くもてこい砂糖の水姉こごさいく柴切山さ柴にはじかれてなな

ころび

踊躍らばしなよく躍れしなのよいは嫁に取

枯木求めて花咲けくと花は咲けども實はな

秋田土産に鱈三本もらたあちやまし(彼方)

ちやまし(此方)ましあけた(ましは廻すこと)歌の節三百三十覺べたとのさあける節(そのさは外の様をいふか)またしらぬ

ふれく五尺の袖を袖をふらねばしなはない

馬鹿にしやんすなれらよだものでもほいとを食の子ではない

南蠻畑(蕃椒)の螢こ彼方の水あ辛いぞ此方の水あ甘いぞ甘い方さ下れ

ひとごに、ふたご、みわたす、よめご、らつよみ、むさし、なんの、やくし、ここのよに、とうよ

(一より十にいたる)

明治卅八年十二月廿五日印刷  
明治卅九年一月一日發行

(非賣品)

發行人兼編輯

青森縣三戶郡八戶町大字窪町十一番戶 榮

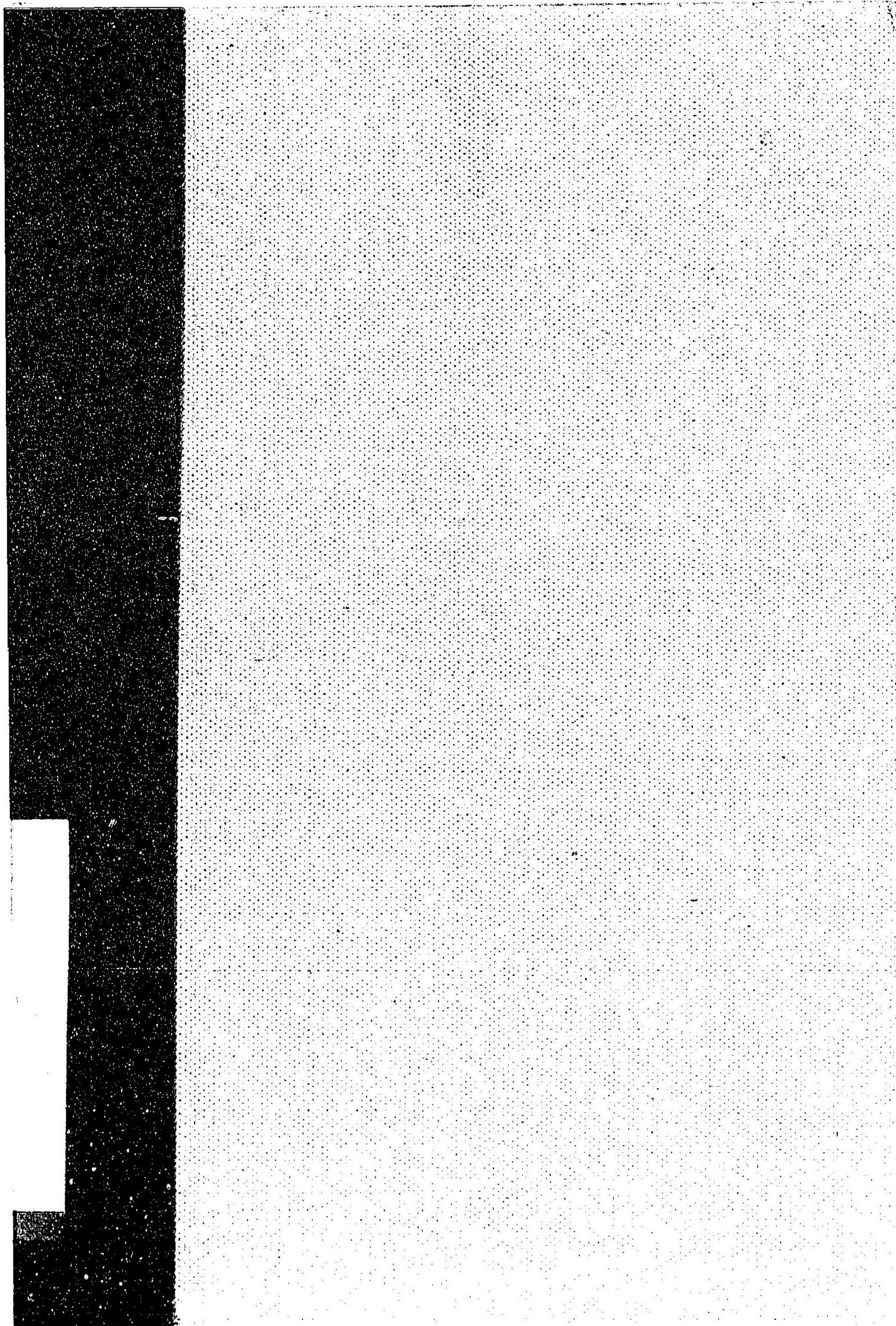
印刷人

青森縣三戶郡八戶町大字荒町十四番戶 大嶋勝三

印刷所

青森縣三戶郡八戶町大字長横町二番地 八戶印刷株式會社

IT3N-24





818.21

Y547m

南部方言集

国立国会図書館

081985-000-9

818.21-Y547n

南部方言集

築瀬 栄 / 編

M39

DAC-6989

